

# 言語表現と話者・聴者の視点

麻 生 道 子

Speaker/hearer's perspective in utterance

Asao Michiko

## 1. はじめに

言語獲得や、言語表現の理解について論じる際に、認知的側面や社会的関係、また発話場面などの言語外の文脈を考慮しつつ、それらとの関連の中で言語を扱っていかうとする研究が70年以降盛んになってきたようである。Bruner (1975), McNeill (1975), Clark (1978) では、言語獲得以前にすでに他者との間で開始されている相互伝達の行為 (communicational act) の様式がそれに対応する言語形式の中に反映されており、媒体は異なるが類似した伝達の機能をもつという意味で、言語獲得を理解するためにより早期の伝達の行為の意味を問う事が重要であると指摘している。また、Offir (1973), Brewer & Harris (1974), Haviland & Clark (1974), Hornby (1972, 1974), Singer (1976a・b), Bock (1977), Gourley & Catlin (1978) らは、大人の言語理解および記憶について、主題・前提・新旧情報など話者の伝達意図、話者・聴者の共有する文脈的知識に焦点をあて、それらがどのように言語の理解・記憶に効果を及ぼすかについて論じている。同様に、言語学においても発話場面や前後の脈絡などとの関連から構文を分析していかうとする研究が盛んになってきているようである (Chafe 1976, Fillmore 1966, 1971, Kuno & Kaburaki 1977, 久野1978)。言語表現がさまざまな人間関係の中で、他者への伝達を想定しつつなされ、かつ相互的伝達の中で他者との人間関係の形成それ自体にも大きく寄与するものである以上、このような相互伝達の側面から言語をとらえていかうとする試みが言語学・心理学の両領域にわたりなされてきているのは当然のことといえよう。

本論ではこのような研究の中から、指呼詞 (deixis) について、特に話者・聴者の位置および視点に関連すると思われる「～の前」「～のうしろ」という表現の意味について論じたものを取りあげ、このような語の解釈が相互伝達の行為のどのような側面を考慮してなされているのかを考察していくことにする。指呼詞を扱った研究は数多くあるが、そのほとんどが言語発達の観点、特に脱中心化の問題としてとりあげたものである。他者の視点や物と物との空間的關係や向きを同時に考慮しなければ解釈し得ないという意味において、確かに指呼詞の正しい使用に到るまでの過程をみる事は、言語獲得における脱中心化の反映としてとらえ得る。だが、後述するように指呼詞の特性それ自体が発話状況と密着したものであるため、解釈はその発話状況全体を考慮しなければなし得ない。従って子供における指呼詞に関する発達研究のなされる前に、まず、大人において通常どのように解釈されているのか、その解釈には発話状況のどのような要素が関連し

ているのかを明らかにする必要があるだろう。また、話者・聴者が、個々の発話状況における諸要素をどのようにとらえつつ発話・解釈をなしているのかを探る手がかりを得るためにも、指呼詞の意味を検討するのは有効であると考え。中でも、前後関係についての表現は、位置を示す物体、それによって位置を示される物体、という対象の位置関係、話者・聴者の位置や視点、発話意図など、相互伝達の行為における主要素のすべてに関連して発話がなされ、解釈のなされるものである。このため、指呼詞のうちでも特に前後関係についての表現の解釈を検討することにした。引用した研究の多くは発達研究であるが、本論では発達の観点からはとりあげず、むしろその実験状況における大人の解釈について考察するための資料として扱った。

## 2. 位置を示す物体の性質

Clark (1973), Lyons (1977) によれば、人間は固有の生物学的構造・地上における棲息環境や運動の様式をもち、これらを基盤として自分の知覚空間 (perceptual space) を発達させており、かつこの知覚空間を反映した言語空間 (linguistic space) が発達しているのであり、言語におけるさまざまな特徴はこのような人間の生物としての特性と対応する場合が多く存在する、とされる。すなわち、重力をもつ地上に直立姿勢で生活し、また人体に対し一定の方向に運動歩行する、という特性が、言語において上下・前後などの区別を生みこのような対の有標性を説明する、というわけである。人体における前後は、物を見たり、手で操作したり歩行する方向により決定されている。Clark はこの人間の前方の空間を「正の知覚場」(Positive perceptual field) と呼んでいる。さらに人体に擬して、動物やまた自ら通常一定の方向に動くものなどには固有の前後があるとされる。日本語においても、

- 1 a 自動車の前にボールがある。
- b 本棚の前に本が落ちている。
- c カメラの前に立つ。

1 a~c の文の示す状況を思いうかべてみれば「~の前」とはほぼ「進行方向」「主に操作のなされる面」「常に観察者の方に向けられた面」と解釈されていることが理解できる<sup>1)</sup>。では、このような固有の前後をもたぬものについてはどうだろうか。

- 2 a 木の前にボールがある。
- b 塀の前に電柱がある。

これを説明するために Clark は、「標準的の出会い場面」(canonical encounter) という概念を導入している。「標準的の出会い場面」とは、人と人が対面している状況である。一般に対話がなされる状況として、人と人が向きあい、互いの「正の知覚場」を一致させている場面を考えよ、というのである。自動車など‘の前’が人体との関連でとらえられたように、固有の前後をもたない物体‘の前’は、この「標準的の出会い場面」に擬してとらえられているものである、とされる。すなわち、

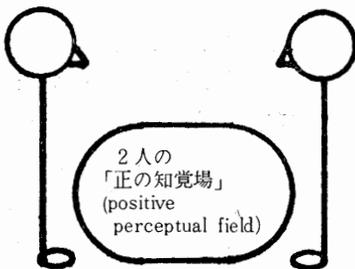


図1 「標準的の出会い場面」  
(canonical encounter)

3 a The fly is in front of the ball.  
   b The fly is between the ball and me.

3 a は 3 b と解釈され、固有の前後をもたない 'the ball' は、話者と「標準的出会い場面」の関係にある他者として前後が決定されるのである。したがってこの場合には前の時とは異なり、話者の居る位置が問題となっている (Clark 1973)。

では「～の前」「～のうしろ」という語を理解するには、以上のべたように、物体の固有な前後と「標準的出会い場面」を想定した場合の話者の位置を考慮すれば十分なのだろうか。De Villiers & De Villiers (1974) は、子供の、言語における脱中心化をみるために指呼詞を用いたような実験を行なった。机の中央に遮へい物を立て、その両側にコップをふせておく。実験者と被験児は机をへだてて向かいあわせに坐る。どちらか一方のコップにはキャンデーがかくされており、被験児は実験者の発話によりそれがどちらのコップに入っているかをあてる、あるいは目かくしをしている実験者に、どちらのコップに入っているのかを指呼詞を用いた発話によって

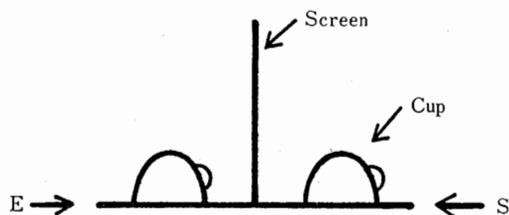


図2 De Villiers & De Villiers (1974) における実験状況 (略図)

教える、というゲームである。たとえば実験者は、"The M & M (=candy) is on this/that side of the wall.", "The M & M is in front of/behind the wall." という。使われた指呼詞は 'my/your', 'this/that', 'here/there', 'in front of/behind', の4種8語である。

理解課題において子供は、最後のペアを除き相手の視点に立たねば課題を解決できない。つまり 'こちら側にある' と言われたら子供にとっては 'こちら側' でない方を探さねばならないわけである。ところが 'in front of/behind' の場合のみ、'壁の前にある' といわれたなら、自分の視点から壁の前にあるコップを探せばよいのである。発話課題ではこの逆で、'in front of/behind' の場合のみ、相手の視点より発話しなければならないことになる。この時、理解課題で統制群としてなされた大人の結果をみると、確かに10名中9名まではこのルールに従って課題を解決しているが、残る一名はそうではなかった。すなわち、'壁の前にある' と言われた時、自分から遠い方のコップを探したのである。

この実験は、「～の前」「～のうしろ」の意味について2つのことを示唆していると思われる。

1. 話者が聴者に未知の情報を与えるという発話の場合、話者は(他の指呼詞とは異なり)聴者の視点から2つの物体の関係をとらえて発話する、つまりここでは、聴者と壁との「標準的出会い場面」を想定し、その「正の知覚場」の一致している場が「壁の前」、そうでない側が「壁のうしろ」と表現されるのである。このことは、固有の前後をもたぬ物体「の前」、「のうしろ」の意味解釈が、決して話者の居る位置のみを問題にしてなされるのではなく、むしろ、話者が心理的にどの視点からこの空間的配置をみているものとして発話しているか、ということに関わるものだ、ということの意味している。この場合、情報を持たぬ聴者に対する配慮により、話者が聴者の視点からの関係として述べている、と聴者は解釈しているわけである。
2. またそのような反

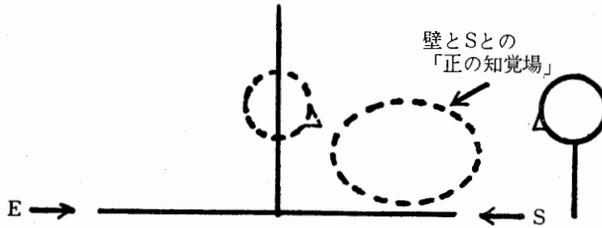


図3 Eの発話‘キャンデーは壁の前にある’における「標準的出会いを場面」を想定した解釈

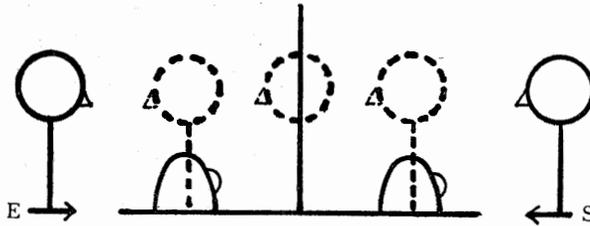


図4 Eの発話‘キャンデーは壁の前にある’における「列」を想定した解釈

応をしなかった大人が一人ではあるがいた。この場合二様の解釈が可能である。彼は話者の視点からの前後として理解したために話者にとって‘壁の前’である側を選んだのかもしれない。あるいは「～の前」の意味が上記の解釈とは異なり、2つのコップ、壁を、自分の前に並ぶ「列」として考えたのかもしれない。つまり、コップと壁を自分と同じ向きに並ぶ他者と想定すれば‘壁の前’のコップは聴者の視点からみてより遠い方のコップとなるわけである。固有の前後をもたぬ物体「の前後」の解釈には、「標準的出会い場面」を想定するものと、また、同じ向きに並んだ「列」としての解釈との2つの場合を考慮しなければならないように思われる<sup>2)</sup>。

### 3. 位置を示される物体の性質

4a 本棚の前に男の人が立っている。

b 男の人のうしろに本棚がある。

固有の前後をもつ物体「の前後」の解釈については、それにより位置を示される物体の向きには関連しない。4aにおいて‘男の人’が本棚の方に顔を向けていようと、本棚を背にしていようと、両者の関係は本棚の固有の前後と男の人の位置とで一義的に決定される。これは4bの場合でも同様である。今度は、男の人の向きと本棚の位置との関連によって決定されるわけであり、本棚の向きには関連しない。しかし、固有の前後をもたぬ物体「の前後」の解釈は、話者の心理的視点が問題となるため、それによって位置を示される方の物体の前後と関連することがある。鈴木(1978)の実験はこれに関する発達の研究としてなされている。実験は、絵を呈示し、「わたしからみて‘机の前の人’にあたるのは(A, B)です」という文におけるA・Bいずれかを選択させるものである。絵は‘私’と‘A’‘B’との向きあい関係が各々異なった4種(図5イ～ニ)のいずれかであり、机は前後(固有の)のないものが描かれている。鈴木は、いずれにおいても常に‘私’により近い人物である‘A’を選択する自己中心的ストラテジー(小4)から、発達に従い絵内の三者の向きあい関係を考慮して反応するようになる(中3)と論じている。ここでの最

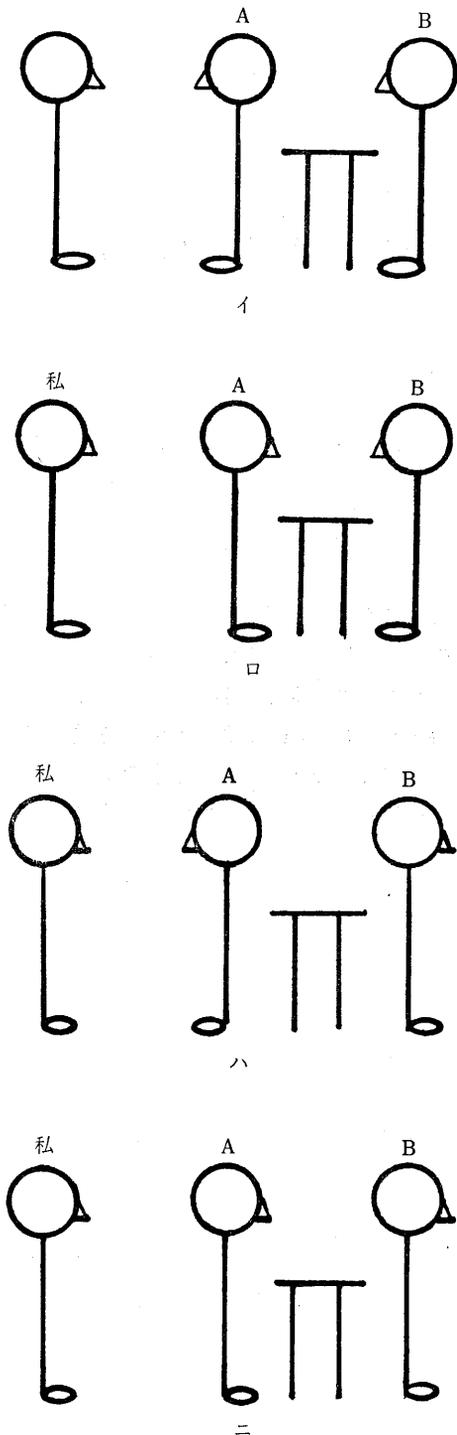


図5 鈴木 (1978) で用いられた絵の向きあい関係 (略図)

高年齢である中3の被験者の結果をみると、図5イ、ハでは‘A’、図5ニでは‘B’が他方より多く選択され図5ロでは有意な差がなかった。これはどう解釈されるのだろうか。

5a 木の前に男の人が立っている。

b 男の人のうしろに木がある。

固有の前後をもたぬ物体「の前後」の解釈には話者の(心理的)視点が関連し、その物体はClark(1973)によれば話者と「標準的出会い場面」の関係にある他者と想定する事により前後が決定されるものであった。また、先述したようにその物体を話者と同方向に向く他者と想定することも稀だがあると考えられる。だが、位置を示される物体の方が固有の前後をもつものである場合、この二つの解釈(「標準的出会い場面」と「列」)はその物体の前後の影響をうけるように思われる。5aの文で最も自然に想定される状況は、話者(の視点)に対し木より近い側に男の人が話者に顔を向けて立っているものだろう(Miller & Johnson-Laird 1976参照)。つまり、4a, bの時とは異なり、5aはほぼ5bと同じ関係を表わす、と考えられる。また、稀ではあろうが、話者(の視点)に対し木より遠い側に話者に背を向けて立っている、という状況を考える人もいるだろう。しかしこのように「列」の解釈をとった時も、やはり、5aは5bと抵触しない。従って5aの解釈は5bのそれに話者の視点を加えたものと言えよう。‘木のうしろ’についてもやはり‘男の人の前’と対になっていると思われる。このように考えるならば、固有の前後をもたない物体「の前後」の解釈は、それによって位置を示される物体の前後とも関連していることが理解できるだろう。鈴木(1978)の実験結果はしたがって次のように解釈されることになる。図5イでは机はAのうしろ、Bの前である。したがってAが「机の前の人」となる。図5ニでは机はAの前、Bのうしろであり、Bが「机の前の人」

となる。この場合、話者を含め全体が方向性をもつ「列」となっている。図5ロではしかし机はAの前でありかつBの前でもあるため、A・Bどちらも「机のうしろの人」ということになる。図5ハでは逆に机がAのうしろでも、Bのうしろでもあるため、A・B共に「机の前の人」であり得る。この場合、話者の視点を加味するなら、話者と「標準的出会い場面」の関係にあるAを選択する方が自然であろう<sup>3)</sup>。

以上のように、位置を示す物体が固有の前後をもたぬ場合、それにより位置を示される物体の前後が解釈に関連する場合がある。ただし、すべての場合においてそうであるとは限らないことは明らかである。

#### 6. 塀の前にアリが一匹いる。

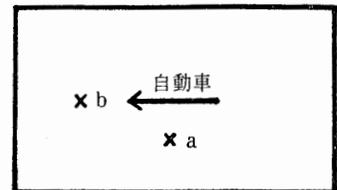
話者が同様にアリであるような場合は除き、通常の場合‘アリ’の向きは「の前」の解釈に関連しないだろう。むしろ純粋に話者の視点との関係でとらえられるものと思われる。おそらく、物体の大きさや性質、話者との関係などが「～の前後」の解釈には常に関わるものであると考えねばならないだろう。両者共に固有の前後をもたぬ場合でも同様である。先述した De Villiers & De Villiers (1974) では、10人中少なくとも9名の大人が自分と壁（位置を示す物体）との関わりで「～の前」「～のうしろ」の意味をとらえたのに対し、Walkerdine & Sinha (1978) で示されている実験状況では、そのようにとらえた大人はほとんどいなかった例が紹介されている。すなわち、大人の被験者に対し、‘赤い積み木を青い積み木の前に、かつ緑の積み木のうしろに置くように’と教示されたが、自己の視点以外に解釈基準のない状況であるにもかかわらず、そのようなにした者はごくわずかであったと報告されている。位置を示す物体と示される物体の類似性、また被験者自身との異質性がこのような解釈に影響していることは明らかだと思われる。

#### 4. 解釈基準の相互関係

以上にもてきたように、「～の前」、「～のうしろ」の解釈には、物体自身の固有の前後、話者の（心理的）視点との「標準的出会い場面」の想定、および「列」の想定などが関連していると思われる。では、これらの異なる解釈をうむ基準相互の関係についてはどうか。

位置を示す物体に固有の前後がある場合、「～の前」、「～のうしろ」の解釈は、話者の視点によるよりも、物体固有の前後による解釈がなされているようである (Kuczaj & Maratsos 1975)。日本語においても、例えば図6において（物体に固有な前後と、話者の心理的視点とが異なった解釈を導くような状況）、‘自動車の前にボールがある’という事態に適切のようにボールを置く、という課題が与えられたら、a・bのいずれに置くだろうか。おそらく、大部分の大人は、自己の視点との関連によるaの位置ではなく、自動車固有の前後を重視したbの位置を選ぶだろう。

Walkerdine & Sinha (1978) では、おもちゃの道路・トラック・自動車を用いた実験について説明している（発達の研究ではあるが、子供と同様大人に対しても同様の課題が与えられている）。図7イ～ニの各事態で、‘自動車をトラックの前/うしろに置くように’という教示がなされ



↑  
話者の視点(=聴者の位置)  
図6 ‘自動車の前にボールがある’  
の解釈

た。実験に参加した大人16名のうち、最も多くとられた解釈は、トラックの前に置くようにとの  
 指示に対し自分の位置には関わりなく、トラックの進行する方向に同じ向きに自動車  
 を置くものであり、9名がそうした(図8参照)。他の者のうち5名は、自分の位置には関係がないが、トラ  
 ックの進行方向に機械的に同じ向きに並べることはせず、トラックが道路を横断しているような

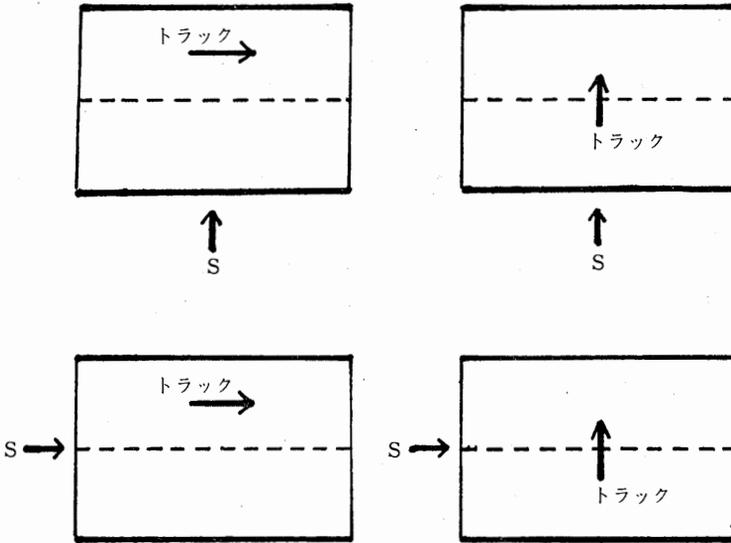


図7 ‘トラックの前/うしろに自動車をおく’課題状況略図  
 (walkerdine & Sinha 1978 参照)

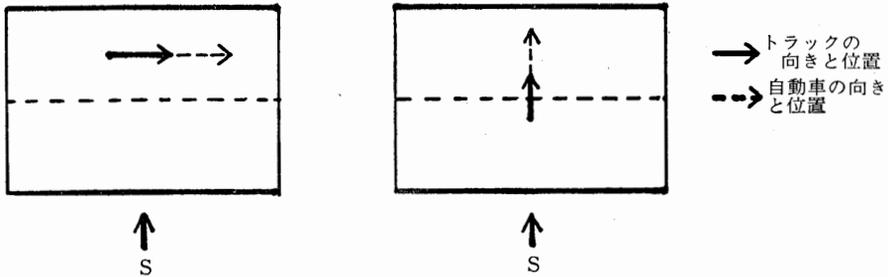


図8 ‘トラックの前におく’の解釈例 (walkerdine & Sinha 1978)

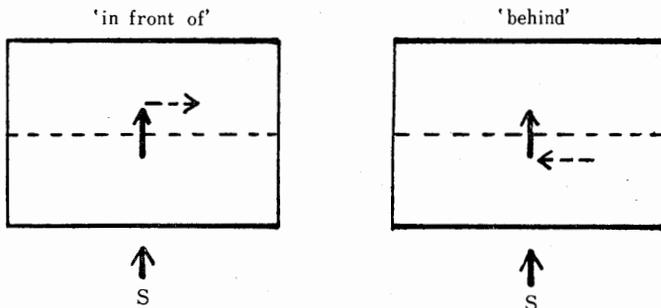


図9 道路に沿っておいた解釈例 (walkerdine & Sinha 1978)

場合に限り自動車は道路に沿った向きに並べる、という解釈をとった(図9)。また、自分の位置との関連でとらえた被験者はわずか1名であった。

彼らの実験の場合には、'道路に沿って'という社会的要因が付加され、また位置を示される物体にも固有の前後があったため、解釈は多様なものとなったが、位置を示す物体の固有な前後という解釈基準が話者の心理的視点という基準に優先するのは確かであるように思われる<sup>9)</sup>。また、位置を示す物体、示される物体両者に固有の前後がある場合は、すでに述べたように、位置を示す物体の固有な前後のみで決定され、それが逆になることはない(第3節参照)のに対し、位置を示される物体のみが固有の前後を持つ場合には、むしろ話者の視点よりもその物体の固有な前後の方が優先されるようである。さらに、話者の心理的視点による解釈には、「標準的出会い場面」を想定するものと、話者(あるいは話者がそこに心理的視点をおいている他者)と同じ向きに並んでいる他者の「列」として想定する場合とがあり、一般に「標準的出会い場面」を想定する場合が多いことはすでに指摘したとおりである。したがってこれらの解釈基準の優先順位は通常の場合、1. 位置を示す物体固有の前後、2. 位置を示される物体固有の前後、3. 話者の心理的視点との「標準的出会い場面」の想定、4. 話者の心理的視点と同一の方向をもった「列」の想定、ということになる。また、物体固有の前後がある場合とそうでない場合の組合せの各々の場合において、もっとも一般的にとられる解釈基準を表1に示した。

表1. 'aはbの前/うしろにある'の解釈における最も一般的にとられる解釈基準

		b	
a	固有の前後をもつ	もたない	
固有の前後をもつ	bの固有な前後	aの固有な前後	
もたない	bの固有な前後	話者の視点とbとの「標準的出会い場面」の想定	

##### 5. 「～の前」、「～のうしろ」の解釈に関するその他の問題

これまで「～の前」「～のうしろ」について、その解釈基準が多様であり、単に位置を示す物体の固有な前後と話者の位置からの「標準的出会い場面」想定の間解釈の二者択一により決定されるものではないことを論じてきた。すなわち、1. 話者の位置とは決して現実には話者の居る位置ではなく、発話の状況や文脈に応じ、話者が心理的にどの(誰の)視点からの表現として言っているのかを把握する必要があり、したがってそのような話者の視点は、現実の話者とは異なる位置にいる現実の聴者の視点である場合もあり、また、2. 話者の視点に関しては「標準的出会い場面」を想定する場合が多いが、話者の視点から同方向に並ぶ「列」を想定することもある。さらに、3. 位置を示す物体に固有な前後のない場合でも、必ずしも話者の心理的視点と関連して解釈がなされるわけではなく、他の物体の固有な前後も解釈に関連しているのである、ということであった。Fillmore (1971)によれば、指呼詞とは、発話によってなされる相互伝達の行為

のおかれる状況の諸側面を知っていることにより、はじめてその解釈が決定されるような語であるとされる。したがって厳密に言えば、固有の前後をもつ物体「の前後」は、決して指呼詞の用法ではない。ただ、個々の発話場面において、その語を指呼詞的に用いるかどうか（あるいはどちらに解釈するか）は、その発話状況全体に関わる問題となる。すなわち、話者が聴者に対し、聴者が話者に対し、どちらの解釈、用法を期待しているかは、状況についての話者・聴者の共有する知識により異なると考えられる。したがって、固有の前後をもつ物体「の前後」の解釈においても、分析の際、発話状況の各側面に対する考慮が必要となるわけである。この意味において、「～の前」「～のうしろ」の解釈は、発話における話者・聴者の空間的・心理的關係が密接に関与しており、相互伝達的行為として言語を研究する際に考慮する必要のある発話状況の重要な側面をこのような分析によりとらえ得ると思われる。特に、先述した話者の心理的視点との関連については、さらに構文における話者・聴者の視点に関わる問題と関連すると思われる。例えば、鈴木（1978）においても、文の主語が「～の前」「～のうしろ」の解釈と関連することが指摘されている。つまり、

6a ほくはヘイの前に立っている女の子を見ている。

b 太郎はヘイの前に立っている女の子を見ている。

6a に比べ 6b においては、‘ほく’の位置と対立する‘太郎’の視点により「ヘイの前」「ヘイのうしろ」が解釈される場合があったのである。これは、久野（1978）のいう「共感」（empathy）の概念と関連しているように思われる<sup>5)</sup>。「共感」とは、‘話し手が何処にカメラを置いて（この出来事を）描写しているか’（上掲書 p. 129）に関わる概念であり、これは話者の心理的視点の問題に他ならないだろう。

このような、構文分析の中でとらえられてきた発話環境や文脈に関する概念と、「～の前」「～のうしろ」などの指呼詞の解釈に関わる話者・聴者の心理過程との関係は、今後個々の実験状況における結果をふまえつつ論じてゆくべき問題となろう。

## 6. その他の指呼詞

以上「～の前」「～のうしろ」の解釈をめぐる論じてきたが、最後にこれまで示した概念を参考にしつつ、他の指呼詞についても二、三触れておきたい。指呼詞と呼ばれるもののほとんどは、話者の視点とその解釈に関与するものである。場所との関連を示す「コ・ソ・ア」の体系もその一つである。英語においては「this/that」, 「here/there」がこれに対応し、これらに関する発達的研究がなされてきている（De Villiers & De Villiers 1974, Webb & Abrahamson 1976, Clark 1978, Charny 1979）。これらの語の解釈は現実の話者の位置と密接に関連していると思われる。研究も多くはこれらの語の意味の獲得についてのものである。だが「～の前」「～のうしろ」と異なり、これらの対応関係では話者の（現実の）位置を中心とした領域区分が問題となっている。すなわち、「コ・ソ・ア」の解釈における解釈基準の違いとは、‘どこまでの領域をコ/ソ/アとするか’によるのであり、「コ」が常に話者の存在する位置を含む領域をさすことが解釈の前提となっている。これに加えて日本語においては「ソ/ア」という区分が存在し、したがって聴者の位置も解釈に関連していると思われる。大江（1975）によれば、「ソ」の系列は聴者の位置に関わるものとされる。すなわち話者の領域が「コ」、聴者の領域が「ソ」で示され、

残余が「ア」で示される、というわけである。だが今井（1978）の実験はこれとは多少異なる解釈を要求する結果を示している。今井は、人形同士の対話場面を作り、そこでの発話において指示する対象の位置をさまざまに変えながら「コレ・ソレ・アレ」のいずれかを選択する課題を用いて、「コ/ソ/ア」の領域区分を試みている。結果により領域区分に2つのタイプのあることが明らかになった。「ソレ」の領域が「コレ」の領域を囲む形をなすものと、そうでないタイプとである（図10）。また、対話者間の距離がますますつれ、「コレ」、「ソレ」の領域がますます明

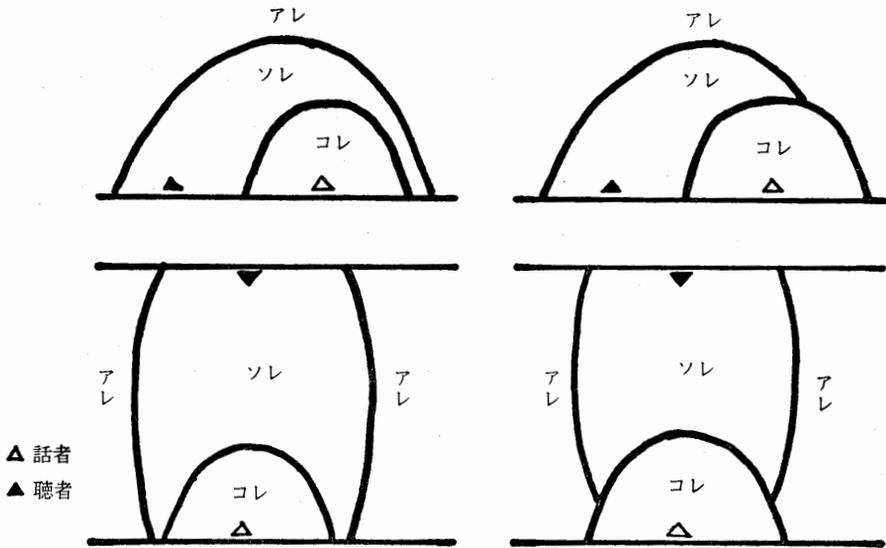


図10 今井（1978）の実験結果「コ・ソ・ア」の領域区分の二つのタイプ(略図)

らかになった。したがって、「ソレ」の領域は、話者の領域に対立する聴者の領域であるというよりも、むしろ、対話の領域のうちの話者の領域を除いた部分である、と考える方が妥当であるように思われる。

「来る」「行く」の語の解釈も、話者の視点と密接に関連したものである。ただし、英語の「come」とは異なり、その解釈基準そのものが多元的なわけではない。「come」においては、発話時・動作時のいずれかに話者・聴者のいずれかが到達点にすることが前提とされている（Fillmore 1966, 1971, 大江 1975）。このため解釈は多義的となり得るわけである（「come」他の理解に関する研究については、Clark & Garnica 1974, Macrae 1976, Clark 1978 を参照）。これに対し日本語の「来る」においては、7a にみられるように話者の視点のみが解釈基準となっている（\*は非文法的文）。

7a あしたそちらに \*来ます/行きます。

b I'll come/go there tomorrow.

ただし、「コ・ソ・ア」の場合とは異なり、話者の位置というより話者の心理的視点が解釈基準となっているため、8a・b の表現が可能である。

8a きとうきみの所に山田さんが来ましたか。

b ジョンはあした彼のパーティにぼくが来ると思っている (大江 1975)。

したがって、これらの語の解釈を扱う場合にも、先述した「共感」の概念との関連が問題になるだろう。

その他、「～てくる」「～ていく」、「やる」「くれる」「もらう」など、語の解釈に話者の視点に関わる問題を含む表現は数多く存在する。これらの語の解釈について詳細に検討することにより、発話と発話状況との関わりを明らかにする上での有効な手がかりが得られるように思われる。

#### 註

- 1) Miller & Johnson-Laird (1976) p. 401参照
- 2) この二様の解釈のどちらが実際に被験者のなしたものは、大人の被験者に対し発話課題が試行されていないため、明らかでない、ただし後者については、実験者が被験者の向かい側に居ない時にも、固有の前後をもたぬ物体の前に別の物体を置くように言われた大人の被験者のほとんどが自分に近い側におき、かつ一部の被験者はやはり遠い側に置く事が他の実験で確認されている (Kuczaj & Maratsos 1975参照)
- 3) 鈴木 (1978) ではこの結果の解釈は発達の観点から以外に明示されていない。ここでの解釈は筆者によるものであり、解釈の是非は鈴木とは関係がない。
- 4) ただし、フランス語における 'devant'/'derrière' については、話者の視点の方が優先されるようである (Piérart 1971)。
- 5) 例えば、「やる」「くれる」に関し、話者の「共感」の度合いは「やる」の場合は主語の方が、「くれる」の場合は与格の方が大きいと考えられる、したがって、
  - イ. 太郎は花子にお金をやった。
  - ロ. 太郎は花子にお金をくれた。
 話者はイの場合は花子よりも太郎に、ロの場合は逆に花子の方に、強く「共感」しているといえる。言いかえれば話者の心理的な視点の近さが「共感」の度合いとして表わされているわけである。
  - ハ. ぼくは太郎にお金をやった。
  - ニ\*. 太郎はぼくにお金をやった。
  - ホ\*. ぼくは太郎にお金をくれた。
  - ヘ. 太郎はぼくにお金をくれた。
 ハ. へが文法的文でありニ、ホが非文法的であることはこの概念によれば説明できる。(Kuno & Kaburaki 1977)

#### 引用文献

- Bock, J. K. 1977 The effect of a pragmatic presupposition on syntactic structure in question answering. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 16, 723-734.
- Brewer, W. F. and Harris, R. J. 1974 Memory for deictic elements in sentences. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 13, 321-327.
- Bruner, J. S. 1975 From communication to language: a psychological perspective. *Cognition*, 3, 255-287.
- Chafe, W. L. 1976 Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view. In C. N. Li(ed.) *Subject and topic*. Academic Press.
- Charney, R. 1979 The comprehension of 'here' and 'there'. *Journal of Child Language*, 6, 69-80.
- Clark, E. V. 1978 From gesture to word: on the natural history of deixis in language acquisition. In J. S. Bruner and A. Garton(eds), *Human growth and development*. Clarendon Press.
- Clark, E. V. and Garnica, O. K. 1974 Is he coming or going? on the acquisition of deictic verbs. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 13, 559-572.
- Clark, H. H. 1973 Space, time, semantics and the child. In T. E. Moore(ed.), *Cognitive development*

- and the acquisition of language*. Academic Press.
- De Villiers, P. A. and De Villiers, J. G. 1974 On this, that, and the other: nonegocentrism in very young children. *Journal of Experimental Child Psychology*, 18, 438-447.
- Fillmore, C. J. 1966 Deictic categories in the semantics of 'come'. *Foundation of Language*, 2, 219-227.
- Fillmore, C. J. 1971 Toward a theory of deixis. Paper presented the Pacific Conference on Contrastive Linguistics and Language Universals.
- Gourley, J. W. and Catlin, J. 1978 Children's comprehension of grammatical structures in context. *Journal of Psycholinguistic Research*, 7, 419-434.
- Haviland, S. E. and Clark, H. H. 1974 What's new? Acquiring new information as a process in comprehension. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 13, 512-521.
- Hornby, P. A. 1972 The psychological subject and predicate. *Cognitive Psychology*, 3, 632-642.
- Hornby, P. A. 1974 Surface structure and presupposition. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 13, 530-538.
- 今井四郎 1978 指示代名詞の指示機能について 北海道大学文学部人文科学論集 15, 1-16.
- Kuczaj, S. A. II and Maratsos, M. P. 1975 On the acquisition of front, back, and side. *Child Development*, 46, 202-210.
- 久野暲 1978 談話の文法 大修館
- Kuno, S. and Kaburaki, E. 1977 Empathy and syntax. *Linguistic Inquiry*, 8, 627-672.
- Lyons, J. 1977 *Semantics 2*. Cambridge University Press.
- Macrae, A. J. 1976 Movement and location in the acquisition of deictic verbs. *Journal of Child Language*, 3, 191-204.
- McNeill, D. 1975 Semiotic extension. In R. L. Solso(ed.), *Information Processing and cognition*. Loyola University of Chicago.
- Miller, G. A. and Johnson-Laird, P. N. 1976 *Language and perception*. Cambridge University Press.
- 大江三郎 1975 日英語の比較研究…主観性をめぐって 南雲堂
- Offir, C. E. 1973 Recognition memory for presupposition of relative clause sentences. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 12, 636-643.
- Piérart, B. 1977 L'acquisition du sens des margueurs de relation spatiale "devant" et "derriere". *Année Psychologie*, 77, 95-116.
- Singer, M. 1976a Context inferences in the comprehension of sentences. *Canadian Journal of Psychology*, 30, 39-46.
- Singer, M. 1976b Thematic structure and the integration of linguistic information. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 15, 549-558.
- 鈴木情一 1979 文と絵の相互作用に関する発達の研究 教育心理学研究。27, 42-47.
- Walkerdine, V. and Sinha, C. 1978 The internal triangle: language, reasoning, and the social context. In I.Markova(ed.) *The social context of language*. John Wiley and Sons.
- Webb, P. A. and Abrahamson, A. A. 1976 Stages of egocentrism in children's use of 'this' and 'that': a different point of view. *Journal of Child Language*, 3, 349-367.

(本研究科博士後期課程)